



“アドベンチャー会計士”の 冒険の旅

～専門性が未来の可能性を広げる～

EY新日本有限責任監査法人 マネージャー
財務会計アドバイザー
(Financial Accounting Advisory Services :FAAS)
Japan Business Services(JBS)海外デスク インドネシア担当
内藤 玄太郎 Gentaro NAITO



2006年新日本監査法人(現EY新日本有限責任監査法人)入所。自動車関連業界を中心として電機、アミューズメント業界等の上場及び法定監査に従事するとともに、IFRS導入支援サービスにも携わった後、2014年よりアーンスト・アンド・ヤング インドネシアに出向。インドネシアの会計監査、税務申告など法定サービスのほか、税務、ビジネス・リスク、M&Aや事業再編に関するアドバイザー業務のサポートに従事。2018年にEY新日本有限責任監査法人に帰任し、財務会計アドバイザー(FAAS)部門においてPost Merger Integration(PMI)や新会計基準の適用支援等に従事。Japan Business Services(JBS)海外デスクインドネシア担当。

スキーの国際インストラクターから公認会計士へ大転身。内藤玄太郎さんは、常に海外で仕事することを意識してきた、異色とも言える経歴を持つ。監査法人でのキャリアスタートから7年、念願の海外勤務を果たした“アドベンチャー会計士”の冒険の旅をリアルに語っていただいた。

インストラクターから 公認会計士へ転身

一公認会計士を目指したきっかけから教えてください。

実は私、前職がありまして。元々はスキーのインストラクターをやっていたんです。新潟のスキー場で国内の資格を取り、当時から海外志向も強かったので、国際資格を取得するため、スキー発祥の国オーストリアやニュージーランドでも仕事をしていました。諸事情で続けることができなくなり、何かフィールドを変えて、違う専門性を身につけなくてはと思ったときに、たまたま選んだのが公認会計士でした。会計に興味がなかったわけではありませんが、特に好きということもなく、なんとなく選んだというのが正直なところ。大学の専攻は心理学でした。会計は大き

な意味では文系ですが、数字があり、基準があり、ルールがあって、専門的で、多少理系の要素もありますよね。そこが面白いかな、とは思いました。

公認会計士になるなら資格が必要、ということで、まず専門学校に通いました。入学当時は会計のことなどまったく知らず、「貸借」の意味さえ知りませんでしたから(笑)、ゼロからのスタートでした。なんとか2回目の挑戦で合格できたので、本当に嬉しかったですね。合格したときは、心底ホッとしました。

この資格は一般的に、大学で会計学を学び、在学中に試験にトライして合格し、3年生、4年生の時には卒業後の進路も決まることが多いでしょうから、私の



パターンは極めて異色だと言えるかも知れません。なにせ、公認会計士を目指したのは社会人になってからです。

一現在の監査法人に入所されたきっかけは？

そもそも、学生時代から公認会計士を目指していたわけではなかったもので「どのファームに入ったらいいか」という知識もあまりありませんでした。EY新日本に入所したきっかけは、「人との出会い」です。ある日、知人の紹介で、EY新日本の方に話を伺う機会があり、その方と話しているうちに「ここがいいな」と。決め手は人との繋がりでした。

一入所されてからのお仕事は？

2006年に入所して、最初に従事したのは監査でした。右も左もわからない状況で、目の前のクライアントにフォーカスしてという日々でした。監査は、ざっくり言えば、毎年この時期にこれをやって、期末になればこれをやって、ある程度終わるとまた同じ作業の繰り返し、という業務です。慣れるまでの時間はすごく面白く、自分の理解が深まっていくのが楽しかったですね。自動車業界のクライアントを担当したので、監査の業務を重ねていくうちに、業界の専門的な知識も増え、それが海外に赴任する際に大いに役立ちました。

初の赴任先は 赤道直下の群島国

—海外赴任は希望されて行かれたのですか？

若い頃からずっと海外で仕事をしたいと思っていました。海外に出るなら、何の仕事をしよと考えた結論が、スキーでした。ほぼ1年中スキーができる環境を求めて、北半球のオーストリアと南半球のニュージーランドで仕事をしました。そこで、英語もある程度習得することができました。公認会計士になってからも、変わらず海外に出ることは意識していました。監査部門で7年ほど経った頃、所内の海外赴任の募集があり、迷わず手を挙げました。海外に出られるなら国はどこでもよかったのですが、人気の欧米諸国はやはり競争率が高く、比較的倍率の低そうなインドネシアを希望しました。

—インドネシアでのお仕事はいかがでしたか？

インドネシアには、EYのJapan Business Services (以下:JBS) の一員として赴任しました。チームは私を含め3名で、20年近く現地で働くベテランの方と私と同じ

ように日本から赴任した税務の専門家の方。インドネシアに進出する日系企業に対して、会計や税務についてアドバイスを、監査のクレーム処理をする、といった業務でした。どちらかといえば、アドバイザリーサービスに近い業務ですね。クライアントも千差万別で、案件もまったく違う。そういうところは面白かったです。また、監査だけでなく、色々な業務にも携わることができました。インドネシアは成長著しい国です。ビジネス機会も多く、日系企業の進出意欲も旺盛です。新しい事業が起ち上がったたり、企業活動は日本より活気に溢れていますね。

—インドネシアで学ばれたことは何ですか？

赴任して最初の失敗は、結果的に「上から目線」での仕事になってしまったこと。クライアントの親会社からの要求をそのまま忠実にクライアントに伝えた。それ自体は正しいことなのですが、提案の仕方が拙かったため、上位下達で指示するような感じになってしまい、相手の反応がとても悪かった。一般論ではありますが、相手を理解し、認め、立てると喜んでもらえるし、仲間として受け入れてくれる。そんな環境を作ると、いろんなことが進めやすくなります。この失敗から、「相手のいいところを引き出し

つつ、こちらの要求ものでもらい、みんなでも良くなっていこう。向こうが困ったことがあれば、ひとつでも手助けしよう。」そうした意識で仕事をしていくように変えました。インドネシアの人々は「我々こそASEANの盟主」と考える傾向があり、それなりにプライドも高いので、それを無視して事務的に行うと、なかなか上手くいきませんよね。

また、「情報はタダではない」。こちらがお願いしたいこと、欲しい情報があれば、相手にもプラスになることをきちんと用意することが大切なんだ、と実感しました。いわば“Win-Win”の関係。失敗を経験してからは意識を変え、相手を認めて、立てながら仕事していくことでクライアントとの関係性が深まっていきました。インドネシアでは、簡単なことがうまくいかず、心が折れそうなときもありました。そんなときに自分に言い聞かせていたのが、“Nothing is ever easy.” 何事も簡単じゃない、という言葉でした。

—インドネシアと日本の違いを感じられたのは何ですか？

時間ですね。インドネシアには“ゴム時間”というのがありまして、時間が好きなように延びるんです。例えば期限。日本だと期限に厳しいじゃないですか、ここまでに絶対終わってくれ、と。でも、インドネシアでは、最初に期限の合意をしても、期限が相手の好きなように延びるんです。それを管理するのはとても大変でした。延びるけど、絶対縮まない(笑)。もうひとつ、日本のチームと現地のチームの板挟みになるのも辛かったですね。現地は「できない」と言い、日本からは「どうしてできないんだ」とくる。クライアントからなかなか資料が出てこないとか、できないなりの理由があって、その板挟みになるのは本当に大変でした。

あと、インドネシアはTwitter数が世界一。携帯依存症っていうぐらい、スマホを使っています。コミュニケーションツールも、メールだとなかなか返信がこないのですが、チャットだとすぐ返ってくる(笑)。監査の現場でも、彼らはスマホを絶対手放さ



ない。日系企業からすると、そういう態度はプロ意識に欠けると見てしまっていますが、彼らの流儀であって、悪いとは思っていないです。

監査の考え方は国によって異なります。アジアの上場会社のうち、BIG4の監査を受けている割合はインドネシアとベトナムが低い。社会主義のベトナムは別にして、インドネシアは企業の透明性に対する意識がそこまで高くありません。監査法人が小さければ小さいほど、会社がパワーを強く持てるということで、上場するときはBIG4に頼むけど、上場後は中小の監査法人に変更し、好きなようにやっているのが実情です。インドネシアの透明性に対する意識や資本市場における意識を世界のレベルまで持っていくのは並大抵のことではありません。会計において、シンガポールは世界の最先端を行っていると思いますが、ASEANの中でも、国家間の格差は感じます。

一言の問題はいかがでしたか？

基本は英語です。スキーマのインストラクター時代にある程度話せるようになっていましたから、言葉で苦労したことはありません。言葉に抵抗がないと、コミュニケーションに対するハードルは低くなります。また、会計というのは“世界言語”です。数字という共通記号があり、言葉ができるかどうかは別にして、同じ世界の話ができるのは大きい。テクニカルタームは難しいかもしれませんが、現在は、国際会計基準(IFRS)にどんどん収斂してきており、たとえ英語が話せなくてもなんとかなる、というのが私の感覚です。英語があまり上手じゃない人の方が、英語に頼らない分、現地の言葉の習得が早く、現地にずっと馴染めますし、仕事上も仲間として受け入れてくれるので、距離はぐっと縮まります。私自身、新しい言葉を学ぶことは好きです。出来るだけ、現地の言葉を学んで、話そうと心がけました。実際、駐在中にかなり話せるようになりましたよ。

インドネシアでの暮らしをお聞きしてもよろしいですか？

インドネシアへは、家族と一緒に赴任し



ました。治安もそれほど悪いこともなく、昼間なら一人で出歩くこともできます。ただし、運転手付きの車で移動するのが基本ですから、日本のように自転車に乗って近くまで出かけるということができないので、その点は多少面倒でした。ジャカルタには日本人学校がひとつしかなかったこともあり、祭りやイベントを通して、駐在員同士のつながりはすぐにできました。駐在員の子供達は入れ替わりが頻繁にあるため、それは当たり前なこと、来る人はみんな仲間という意識が強く、子供は喜んで通っていました。生活自体はモノも揃いませし、元々多民族国家ということもあってか、オープンな雰囲気の中で暮らすことができました。駐在はその街に暮らすので、日本からの観光旅行ではほとんど訪れることがない、地元の人しか知らないような素晴らしい場所に行けるのも、駐在の醍醐味といえるでしょう。

スペシャリティを活かしつつ これからも冒険を

一帰任されてからのお仕事についてお聞かせいただけますか。

4年間のインドネシア駐在を終えて2018年に帰任し、現在はFinancial Accounting Advisory Services(以下:FAAS)のメンバーとして、財務会計のファイナンシャルアドバイザーを務めています。インドネシアでの経験を生かせる専門家として、今でもインドネシアに仕事で関わっています。駐在時代のインドネシアは企業買収の案件が多く、そこに関わったことが現在に繋がっていると言えますね。海外で新しく会社を買ったとき、その新しい会社を本社のオペレーションに合わせる、特に会計面で合わせるという作業を日本で行うわけですが、現地サポートに関与した経験を活かし、帰任後はそのチームで仕事させていただくことになりました。

FAASのメンバーではありますが、並行して、海外の日系企業を支援するJBSのインドネシア担当デスクも務めており、年に3、4回はインドネシアに出張します。インドネシアの日系企業やインドネシアに進出を検討している企業向けに、進出するときの会計・税務・現地で企業活動していく上での会計・税務に関するアドバイスを提供しています。

日系企業でよくあることですが、買収する際にあまり専門家を関与させたりしません。「自分達でなんとか評価して買って



しまおう」という傾向があります。このため、買ってから、「こんなはずじゃなかった」という齟齬は割と起こりやすいんです。インドネシアは特に、財務情報が取りにくい国で、帳簿も“表、裏、本物”と3つの帳簿があるという具合なので、「こんなはずじゃなかった」とならないよう、私達のような専門知識を持ったアドバイザーがいればかなりお役に立てますよ、と言いたいです。

一内藤さんの未来予想図は？

JBSは各国にデスクを持っており、駐在から戻ってきた者がそれぞれ担当しています。現地からの様々な質問を、日本側で対応しています。現在は、インドネシアを担当しているので、さらにインドネシアを極めたいなど。また、将来的にはもう少しエリアを広げて、『ASEAN全域の専門家』になれば、と考えています。一度海外に出るとなかなか次の駐在に出にくくなりますが、機会があればまた挑戦したいですね。ASEAN以外であえて挙げるなら、ロシア

かな。ロシアって全然言葉が違うじゃないですか！知らない土地で全く新しい言葉や文化に触れながら、仕事をしてみたいという気持ちを持っています。

一ありがとうございます。最後に、公認会計士を目指す学生にメッセージをお願いします。

海外に出るなら、やはり専門性がとても大切です。当然、公認会計士としてのベースは必要ですが、そのほかに何を、どんな分野を専門にしているか、を自分でアピールできるかどうか重要です。私は監査時代、自動車業界のクライアントがメインで、海外勤務を志望した際のアピールポイントも「私は自動車業界に強いです」でした。実際、インドネシアでの日本車のシェアは約95%。赴任してみると、クライアントは大体自動車業界に関わっていたので、「自動車のことなら私にお任せください」と自信をもって言えたから、仕事のやりやすさは、他の人と比べて全然違ったんじゃないかと思います。監査にしろ、税務にしろ、

会計のどの部分をやっていても、「これが私の専門です!」と言えるぐらいになれば、どの国に行ってもうまくやれるし、後のキャリアに役立つと思いますね。怖がらずに、とにかく海外に出てみることをお勧めします。

このインタビューは2019年8月1日に実施されました。

 **日本公認会計士協会**
The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.jicpa.or.jp/>